

わたしの構想

2025. 12

no. 81

MY VISION

地域に広がる 哲学カフェ

近年、日本各地で「哲学カフェ」の活動が広がっている。その背景には何があるのか。
また、哲学カフェの広がりには社会にどのような意義をもたらすのかを探った。

企画に当たって

About this Issue

宇野重規

NIRA総研 理事／東京大学社会科学研究所 教授

識者に問う

Expert Opinions

鷺田清一

哲学者／大阪大学 名誉教授

永井玲衣

作家

堀越耀介

東京大学共生のための国際哲学研究センター 上廣共生哲学講座特任研究員

八木絵香

大阪大学COデザインセンター 教授

横井史恵(きゃさりん)

Atelier Sistermoon 主宰

地域に広がる 哲学カフェ

近年、日本各地で「哲学カフェ」の活動が広がっている。1990年代にフランスで始まったこの動きは、日本でも早くから紹介され、実践もされてきた。カフェなどの日常的な場で自由に語り合う哲学対話が、教育やビジネスの現場、地域社会に広がりを見せている。

なぜ哲学カフェの活動は人々の間で広がっているのか。さらに、その広がりには社会にどのような意義をもたらすのか。

第一人者の哲学者や研究者、さまざまな現場で活躍する実践者に聞いた。



地域に広がる哲学カフェ

——対話の場に生まれる新たな政治の回路



最近、日本各地であらためて「哲学カフェ」の活動を目にすることが多くなっている。哲学カフェの試み自体は、一九九二年にフランスのバリで始まったものであり、哲学者マルク・ソーテの『ソクラテスのカフェ』がよく知られている。日曜日の一時にバステュー広場のカフェに集まった人々は、哲学者とともに多様なテーマを語り合った。それは哲学を象牙の塔から解放し、普通の市民が、自分たちの関心を自分たちの言葉で語り合う機会を持つことを意味した。

このような哲学カフェについては早くから日本でも紹介され、さまざまな実践も行われてきた。興味深いのは、哲学カフェが日本社会に定着しただけでなく、地域における住民参加とも結びついて展開していることである。あるいはそこに、地域が抱える課題や社会の変化を見いだすこともできるかもしれない。地域において対話が希薄化し、社会的分断が広がる時代において、哲学カフェは新たな可能性を切り開くことが期待される。今回の「わたしの構想」

は「地域に広がる哲学カフェ」と題して、多様な実践を展開している研究者や市民の声を届けたい。

社会の一市民として問い、語り、そして皆で聴き合う

日本に早くから哲学カフェを紹介すると同時に、大阪大学などでの実践を行ってきた哲学者の鷲田清一氏は、「哲学カフェとは、見知らぬ者同士が、自分の持つ属性とは関係なく一市民として、この社会で生きている中で体験したことを語り、意見を述べ、そして他者の話を聴く場である」と定義する。背景にあるのは、地域社会や労働組合などの中間団体の機能低下であり、今こそ「パブリック・オピニオンを最小の規模から作り出していく試み」が求められていると指摘する。

哲学対話において、「聴く」ことの重要性を説くのが、作家の永井玲衣氏である。大切なのは、「参加者の『問い』を皆で聴き合うこと」であり、「問いとは、分からなさという弱さの開示であり、抵抗であり、他者を求める言葉だ」という。死刑制度を論じるにしても、直ちに「賛成か、反対か」を問うのではなく、「償うとは」など、そもそもの問いから対話を進める。「部分的であっても他者と自分の重なりを知り、その複雑さに身を置けるようになる」のが対話の意義であると永井氏は説く。

さまざまな現場で、対話の実践が進む

東京大学共生のための国際哲学研究センターの堀越耀介氏は、いわゆる「教育困難校」での経験から、多くの子は勉強ができないのではなく、そもそも学ぶ機会がなかったと指摘する。「勉強は本当にしなければいけないのか」など、

粘り強い対話から、「子どもたちが自分の言葉を手に入れ、自分の考えや言葉を信頼できるようになった」と報告している。コミュニケーションの変化は組織の変容をも生み出す。アカデミアの哲学もまた当然、変わらなければならない。

大阪大学では、大学院生の共通教育として対話の場を授業に組み込んでいる。COデザインセンターの八木絵香氏は、「異分野の専門家とコミュニケーションを取れない者が、専門性を持たない人とコミュニケーションを取りながら社会にある問題に取り組めるとは考えられない」という。どのような選択であれ、自分が正しく、それ以外の選択は間違っていると人は思いがちである。分断を深化させない、異質な見解に耐える「知的な体力」の涵養^{かんよう}が必要だろう。

市民の立場から、市民参加型のアートフェスティバルを開催してきたのが、「ぎゃさりん」こと横井史恵氏である。現在は川崎市武蔵新城で「大人の哲学カフェ」を開いているという。友達同士や職場では、それぞれの価値観に踏み込む対話の機会は多くない。「人間関係そのものを深めることなく、テーマについての対話だけを深める、その気軽さが現代の人々の需要に合っている」という指摘は貴重だろう。哲学カフェは信頼できる政治家選びや行政への働きかけにもつながると横井氏は強調する。

現代の新たな政治の回路に

地域社会や労働組合など、伝統的な中間団体の機能が低下するなか、例えば、民主主義の基盤にあるはずの対話の機会が、いつの間にか失われつつあるのだろう。知識を持つものがそれを開陳するのが対話ではない。一人ひとりの言葉にならない不安や不満を口にできる場、「賛成か、反対か」を直ちに求められるのではなく、より根底的な「そ

もそも」の問いを語り、聴いてもらえる場が今こそ必要である。「哲学カフェ」が現代の新たな政治の回路になりつつあるのかもしれない。

宇野重規 (うの・じゅぎ)..... NIRA総合研究開発機構理事。東京大学社会科学研究所教授。東京大学博士（法学）。専門は政治思想史、政治哲学。

KEY WORDS

哲学カフェ、市民参加、新たな政治の回路

鷺田清一

哲学者／大阪大学 名誉教授

安心して異なる意見を出し合える場で、
デモクラシーが育まれる

KEY
WORDS

中間団体の機能低下、専門家への失望、民主主義のレッスン

永井玲衣

作家

「そもそもの問い」「聴き合える場」が
信頼を築く

KEY
WORDS

聴き合える場、記号化ではない人との向き合い方、信頼を築く営み

堀越耀介

東京大学共生のための国際哲学研究センター
上廣共生哲学講座特任研究員

哲学対話が教育現場、ビジネス組織の
意識変化を醸成する

KEY
WORDS

自分の言葉、そもそもの問い、哲学の更新、生き方としてのデモクラシー

八木絵香

大阪大学 CO デザインセンター 教授

異なる価値観が共存する状態に耐える
「知的な体力」を対話で養おう

KEY
WORDS

自分の専門性の相対化、異質な見解に耐える、「小さな政治」の場

横井史恵（きゃさりん）

Atelier Sistermoon 主宰

地域のさまざまな人が
一つのテーマで自由に対話

KEY
WORDS

気軽な学び、人との適度なつながり、政治の議論を深めるきっかけ

識 者 に 問 う

なぜ哲学カフェの活動が
広がっているのか。
社会にどのような
意義をもたらすのか。

インタビュー実施：2025 年 10 月～11 月

聞き手：宇田川淑恵（NIRA 総研研究コーディネーター・研究員）

鷺田清一〔2014〕
哲学の使い方
岩波新書

が芽生えてきた。

また、専門家に対する失望も、哲学カフェが広がった背景にある。東日本大震災で原発事故が起きた際、専門領域を越えて総合的に語りえた専門家はほとんどおらず、専門家への不信感が募った。これをきっかけに、専門家任せにせずに自分たちで考えてみようという動きが広がった。その後、環境破壊、気候変動など取り扱う問題が拡大していく。

哲学カフェの直接的な意味は、自分たちが抱えている問題を専門家任せにするのではなく、自力で、互いに関心を交^{こうき}叉させながら語り合うことにある。これは、中間団体が痩せ細った中で、パブリック・オピニオンを最小の規模から作り出していく試みでもある。

昨今、「せろん」と称される民衆感情^{ポピュラー・センチメント}で他者を攻撃する人が目立つ一方、パブリック・オピニオンである「よろん」で動く人は少ないし、そのための場もない。しかし、パブリック・オピニオンをきちんと持ち、他の人たちとともに活動していきたいと思う人は確かに存在する。哲学カフェの意味は、対話で「よろん」を得た人々が、自分の活動の場でそれをどう生かしていくかにもある。哲学カフェは、社会活動あるいは政治の営みにつながる一連の過程の初発の部分を担っており、民主主義のレッスンともいえるべきものとしてある。

鷺田清一（わしだ・きよかず）

哲学者（臨床哲学・倫理学）。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。臨床哲学を提唱し、大阪大学教授在任中、大学院文学研究科に臨床哲学研究室を創設。大阪大学総長、京都市立芸術大学学長、せんだいメディアテーク館長も務めた。著書多数。『分散する理性（勁草書房）』『モードの迷宮（中央公論社）の二著でサントリー学芸賞受賞。『聴く』ことの力（TBSブリタニカ）で桑原武夫学芸賞、『ぐずぐず』の理由（角川学芸出版）で読売文学賞、『所有論』（講談社）で和辻哲郎文化賞を受賞。『哲学カフェのつくりかた』（大阪大学出版会）監修。



識者に問う

なぜ哲学カフェの活動が広がっているのか。社会にどのような意義をもたらすのか。

安心して異なる意見を出し合える場で、デモクラシーが育まれる



鷺田清一

哲学者／
大阪大学 名誉教授

哲

学カフェとは、見知らぬ者同士が、自分の持つ属性とは関係なく一市民として、この社会で生きていく中で体験したことを語り、意見を述べ、そして他者の話を聴く場である。参加者は職業も肩書も伏せたまま、パーソナルな体験をパブリックに、丁寧な言葉遣いで話していく。小難しい専門用語は使わない。対話にあたっては、互いに話を遮らずに聴き、何を言っても頭ごなしに否定されたりはしないという安心感が重要である。参加者は、この場で新たに得た視角を咀嚼^{そしゃく}して自分の中に取り込み、自分の考えを組み立てなおすきっかけとする。こういった場を開こうと、われわれは哲学カフェを始めた。

哲学カフェのような存在が求められるのは、時代的な背景がある。一つには、地域社会も労働組合も中間団体として十分に機能しなくなった結果、人々が結集して世論を作り出し、社会運営に物申すことができなくなってきたという事情がある。今やわれわれは、選挙で一票を投じるくらいでしか、政治に関わらなくなった。そうした中で、もう一度、自分たちが直面している問題とは何か、どんな解決があるのかを、自分たちで考えていこうという意識

奥田知志〔2025〕
わたしがいる あなたがいる なんとかなる
「希望のまち」のつくりかた
西日本新聞社

めることで、対話を進めてみる。対話によって、「賛成か、反対か」という単純な二項対立を超えて、部分的であっても他者と自分の重なりを知り、その複雑さに身を置けるようになる。それが対話の意義であり、対話が他者や社会の信頼を築く営みである理由だ。

日常生活の中では、人を「先生」や「部長」など役割や属性という記号で見えてしまいがちだ。しかしそれは、人が非人間化されてしまう危うさを伴う。他者を、非人間化した記号で見る先には、「地続き」で戦争や虐殺がある。対話は、記号化ではないやり方で人と向き合う時間や体験だ。対話の場では、肩書を外した一人の人間として立ち現れる。聞きたくないことも暴力で解決せず、耐えて許し合いながら、互いの「問い」を聴き合い、一緒に言葉を育てる。対話とは、粘り強い営みだ。

今の社会には「聴き合える場」が少なすぎる。哲学対話がブームとして消費されることを心配している。私は対話の後、「次はあなたが対話の場を作って」とお願いしている。多くの人が対話を必要としながら、なぜ少ないのか。哲学対話に限らず、読書会や福祉の集まりでもよい。気軽に聴き合える場を増やしていくことが重要だ。

永井玲衣（ながい・れい）

人々と聴き合い、考え合う対話の場を、学校や企業、美術館、シエルター、路上など全国各地で開く。問いを深める哲学対話や、政治や社会について語り出してみる「おずおずダイアログ」、せんそうについて表現を通して対話する写真家・八木咲とのユニット「せんそうってプロジェクト」ほか。著書に『水中の哲学者たち』（晶文社）、『世界の適切な保存』（講談社）、『やみしくて「めん』（大和書房）、『これがそうなのか』（集英社）。第一七回「わたくし、つまり Nobody 賞」受賞。



識者に問う

なぜ哲学カフェの活動が広がっているのか。社会にどのような意義をもたらすのか。

「そもそも問い」「聴き合える場」が信頼を築く



作家
永井玲衣

哲 学対話は、開く人によって作り方が異なるのが魅力だ。私が試みているのは、「誰もが自分の哲学をしている。それを表現し聴き合う場を一緒に作りましょう」というスタイルだ。スキルや知識よりも、「聴く、待つ、信じる」という態度を重視していて、誰でも始められる。ファシリテーターやルールという言葉は使わない。場を管理して何かを生み出そうとするより、「あなたの話を聴かせてもらおう者」として存在するようにしている。

大切にしているのは、参加者の「問い」を皆で聴き合うこと。不安や苦しみ、好奇心、怒りといった心に煮えたぎるモヤモヤを、まともないままでも言葉にしてもらう。それが「問い」だ。問いが参加した人々をつなげるのは、問いとは、分かなさという弱さの開示であり、抵抗であり、他者を求める言葉だからだ。

また、いきなり「死刑制度に賛成か、反対か」「核兵器を持つべきか、持たざるべきか」と問うのではなく、意見が合わなくても、「そもそも償うってどういうこと?」「核兵器を持つと強い国と言われるけど、そもそも強い国って何?」のように「そもそもの問い」から始

特集：哲学教育／哲学対話

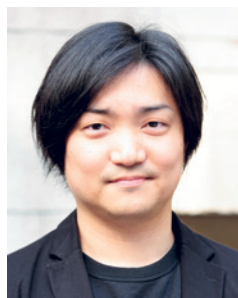
『思想』2025年10月号 No. 1218

岩波書店

識者に問う

なぜ哲学カフェの活動が広がっているのか。社会にどのような意義をもたらすのか。

哲学対話が教育現場、ビジネス組織の意識変化を醸成する



堀越耀介

東京大学共生のための
国際哲学研究センター
上廣共生哲学講座
特任研究員

いわゆる「教育困難校」の生徒との哲学対話が、私のキャリアの始まりだ。すぐに分かったのは、多くの子は勉強ができないのではなく、親の介護や自身の不登校のために学ぶ機会がなかったということ。いろいろなことを考えざるを得ない環境で生きてきた子どもとの対話では、実にさまざまな問いが出てくる。学校になぜ行かなければいけないのか、勉強は本当にしなければいけないのか――。問いを抱いていても、それを考える機会がない。そうした子どもと毎週のように哲学対話を五年ほど続けていると、中には研究力の高い大学に進学する生徒も出てきた。進学は分かりやすい成果だが、変化の核心は、子どもたちが自分の言葉を手に入れ、自分の考えや言葉を信頼できるようになったことにある。

変化という点では大人も同じだ。近年、イノベーション創出や人材育成などの問題を抱える大企業の幹部から、ビジネス領域で「大人のための哲学対話」の研修を依頼されるようになってきた。多くのビジネス人材は、問題解決の思考、すなわちHOWを問うのは得意でも、WHYやWHATという「そもそもの問い」を立てることに課題があるという。「そもそも

成功とは何か」と切り出しても、「どうやったら成功できるか」の話になってしまう。哲学は、意味や概念をクリティカルに考え続ける。正解は一つではなく、回答に間違いもないため、哲学的な問いの前には全員が対等だ。対話の中で次第に「考えたい、だから問う」という空気が醸成され、「そもそも」の話ができるようになっていく。コミュニケーションの変化は、やがて組織の変容を生む。それが、ビジネス領域の哲学対話の醍醐味だ。加えて、ビジネスパーソンの多くは、選挙で投票行動の中心を担う人々でもある。彼らが哲学対話を通じて変わることで、より包摂的で民主的な社会の実現に寄与することを期待している。

アカデミアの哲学もまた、新しい「知」に出会い、変わらなければならない。例えばカメラを開発する技術者は、哲学における写真論には必ずしも明るくないが、同時に哲学の側も開発現場で考える人たちの「知」を知らない。哲学がヒエラルキーの上位にあり、それを下に広げていくのではなく、現場の暗黙知や身体知を包摂して考察し、哲学を更新していかなければならないことが、いま哲学者たちに突き付けられている。新たな「知」を包摂し変化していくことは、真の「知」の探求であり、生き方においてデモクラシーを実践することに通じる。



堀越耀介（ほりこし・ようすけ）

学校教育や企業・組織で哲学する活動に哲学プラクティスの研究、および、教育哲学の研究をしている。博士（教育学）（東京大学）。ハワイ州立大学マノア校、上智大学グローバル・コンサーン研究所、明治大学研究知財研究機構の客員研究員を兼務。また、複数の企業でアドバイザーを務め、「哲学思考」を用いたコンサルティングやワークショップを実施。実践の場で哲学をどう生かすか、哲学を私たちの生活にどう結びつけるかという視点で活動している。著書に『哲学はこう使う―問題解決に効く哲学思考』『超入門』（二〇二〇年、実業之日本社）ほか。

八木絵香〔2019〕
続・対話の場をデザインする
安全な社会をつくるために必要なこと
大阪大学出版会

もつとも、共存すること、すなわち、異なる価値観の存在を許容することは、時として心理的な負担をもたらす。さまざまな自然災害や、福島原子力発電所の事故、コロナ禍における諸課題などを巡って、大きな分断がおこってきたことが示すように、苦しい選択であるが故に、自らは「正しい」選択をしており、それ以外の選択は間違っていると考える心性が人にはある。とはいえ、どこかで踏みとどまらなければ、分断が進むだけになってしまう。互いを理解不能な他者として扱い、対話自体が成立しなくなる危険は避けるべきだ。

分断を深化させず、自分とは相いれない異質な見解に耐える「知的な体力」を養うためには、対話というプロセスが助けになる。唯一の正解を追い求めるのではなく、互いの考え方の「ずれ」を、対話続けながら丁寧に解きほぐしていくことで、矛盾する価値が同時に存在する曖昧な状況に耐える力を持てるようになる。

こうした対話を増やすことは、民主主義の形成と維持にも貢献する。民主主義は、私たちの手がなかなか届かない高い次元でだけでなく、日々の生活の中で対話しながら違う考えを理解するという、小さな場での営みの積み重ねからも成り立っている。こうした日常における「小さな政治」の場として哲学カフェのような場所が増えていくことを期待したい。

八木絵香（やぎ・えこう）

専門は、科学技術社会論、ヒューマンファクター研究。原子力技術、気候変動問題など意見や利害の異なる人同士が対話・協働する場づくりを対象とした実践研究に取り組む。博士（工学）（東北大学）。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（当時）准教授等を経て、二〇二〇年より現職。放送大学客員教授を兼務。特定放射性廃棄物小委員会委員など公職多数。著書に『対話の場をデザインする』『続・対話の場をデザインする』（いずれも大阪大学出版会）、『リスク社会における市民参加』（二〇二二年、放送大学教育振興会）ほか多数。



識者に問う

なぜ哲学カフェの活動が広がっているのか。社会にどのような意義をもたらすのか。

異なる価値観が共存する状態に耐える 「知的な体力」を対話で養おう



八木絵香
大阪大学
COデザインセンター
教授

大阪大学COデザインセンターでは、大学院生の共通教育として、「対話」を重視した授業を行っている。背景には、同じ大学に所属する専門分野が異なる大学院生同士ですら、相互理解が難しいという事情がある。異分野の専門家とコミュニケーションを取れない者が、専門性を持たない人とコミュニケーションを取りながら社会にある問題に取り組めるとは考えられない。まずは専門が異なる他の大学院生と意思疎通する作法を学ぶ必要がある。

この授業で、異分野の大学院生同士が議論すると、議論は容易には収束しない。彼らがそれぞれ身に付けた知識以上に、専門家としての作法に無自覚なままに、議論を続けようとするからである。やり取りが続く中で互いの違い、そしてそれが何に由来するのかを意識して初めて、院生たちは自身の思考の癖に気づき、他の考え方それぞれの価値観や合理性の存在を実感する。また、自分の専門性を相対化し、異なる考え方をする他者を、同じコミュニケーションで共存する存在として認識できる。

なぜ哲学カフェの活動が広がっているのか。社会にどのような意義をもたらすのか。

地域のさまざまな人が一つのテーマで自由に対話



横井史恵
(きやさりん)
Atelier Sistermoon 主宰

私

は神奈川県川崎市で、長く、市民参加型のアートフェスティバルを開催してきた。その中で導入した一つが、哲学カフェだ。コロナ禍でさまざまな活動が制限されていた時期、対面で人と話をする機会が希少となり、交流を求める人たちからの需要があった。現在、武蔵新城で開催している『大人の哲学カフェ』は、リベラルアーツとしての哲学ではなく、日常の事柄がテーマだ。「愛とは」「生きづらさ」「社会的制裁」など、毎回一つのテーマについて共に考え、自由に語り合いながら、他者と共に生きる意味を、参加者と共に探ってきた。

哲学カフェは「気軽な学び」と「人との適度なつながり」を地域に提供する、社会的な仕掛けである。世代や性別、国籍を超え、背景の異なるさまざまな人々が参加し、一つのテーマを巡って、初対面の人同士であってもそれぞれの経験や価値観、考えを語り合う「対話の場」である。その意義は、他者理解と自己理解を深める経験にあると感じている。対話の中で話者のバックボーンが見える瞬間があり、話している本人も、言語化することで、あらた

フランツ・カフカ〔2014〕 絶望名人カフカの人生論

頭木弘樹（編訳）、新潮文庫

めて自分の考えに気づく瞬間がある。この自己、他者に対する理解が「あ、なるほど、そういうことか」と腑に落ちる経験をする、と、「行ってよかった、また行こう」と思うのだ。人の話を聴いて気軽に学べる場でもあり、自分の話を熱心に聴いてもらえる幸福な場でもある。友達同士や職場では語りづらい、でも話してみたいテーマについて対話できる機会は、実は余りない。人間関係そのものを深めることなく、テーマについての対話だけを深める、その気軽さが現代の人々の需要に合っているように思う。社会的な関係を構築することが苦手な人や、地域との関わりを面倒に感じるシニア層の男性も参加しやすい。ただし、暴走してけんかを始める人がいると、参加者に「傷つき体験」が生まれてしまうため、ファシリテーターの技術が必要だ。

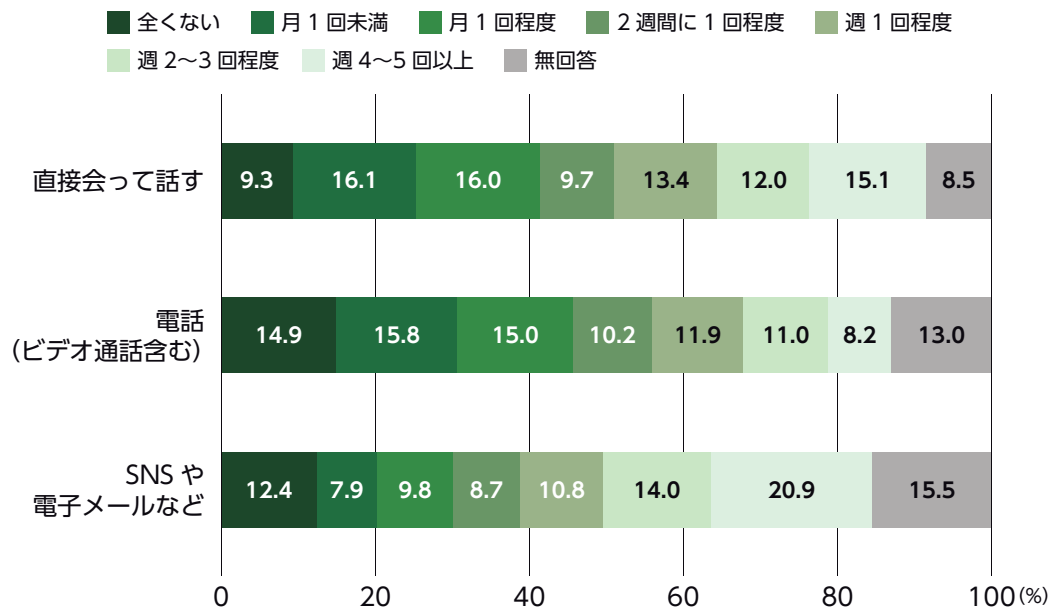
例えば政治的な場面においても、野次ではなく「対話」が民主主義の基本となり、政治への悪いイメージを対話を通じて解消し、信頼できる政治家を市民が選び、行政に働き掛けていく。政治や外交を利害調整の場とするのではなく、もっと本質的な議論を深めていくために、そのきっかけとして哲学カフェは機能し得るのではないか。



横井史恵(きやさりん) (よこい・ふみえ(きやさりん))

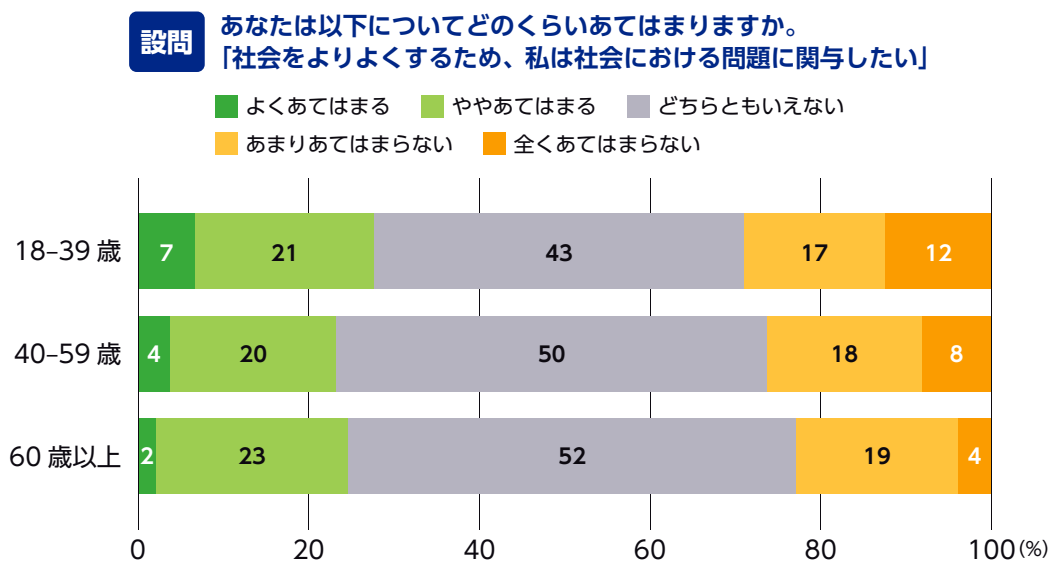
二〇〇〇年代より、アートを切り口とした市民参加型のプロジェクトを多数立ち上げる。二〇二〇年より川崎市内にて、大人向けの哲学カフェ、こども向けの哲学カフェ、政治哲学者ハンナ・アレントの著作を読み解く読書会などを始めた。ほかに、参加型アートフェスティバル『街ナカアート』、哲学と音楽のサロン『ETSU-ON SALON』、認知症カフェを開催するなど、地域で幅広く活動している。女子美術大学芸術学部産業デザイン科工芸専攻卒。赤坂宝石彫金学院にて彫金を学び、ジュエリーメーカー勤務を経て、自身の工房、Atelier Sistermoonを主宰。

同居していない家族や友人たちとのコミュニケーション頻度（2024 年）



出所) 内閣府孤独・孤立対策推進室「人々のつながりに関する基礎調査（令和 6 年）調査報告書」令和 7 年 4 月
https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/zenkokuchousa/r6/pdf/tyosakekka_gaiyo.pdf

日本人の社会に関与する意志



注) 本調査は 2025 年 3 月 4 日～6 日に、Web 上で行われた。有効回答数は、1,552。本調査の速報については「第 3 回政治・経済・社会に関する意識調査（NIRA 基本調査）（速報）」を参照：<https://www.nira.or.jp/paper/research-report/2025/122507.html>
 出所) 本調査のローデータは、2026 年 1 月を目途に NIRA 総研ウェブサイト公開予定

日本での哲学カフェ・哲学対話の広がり歴史

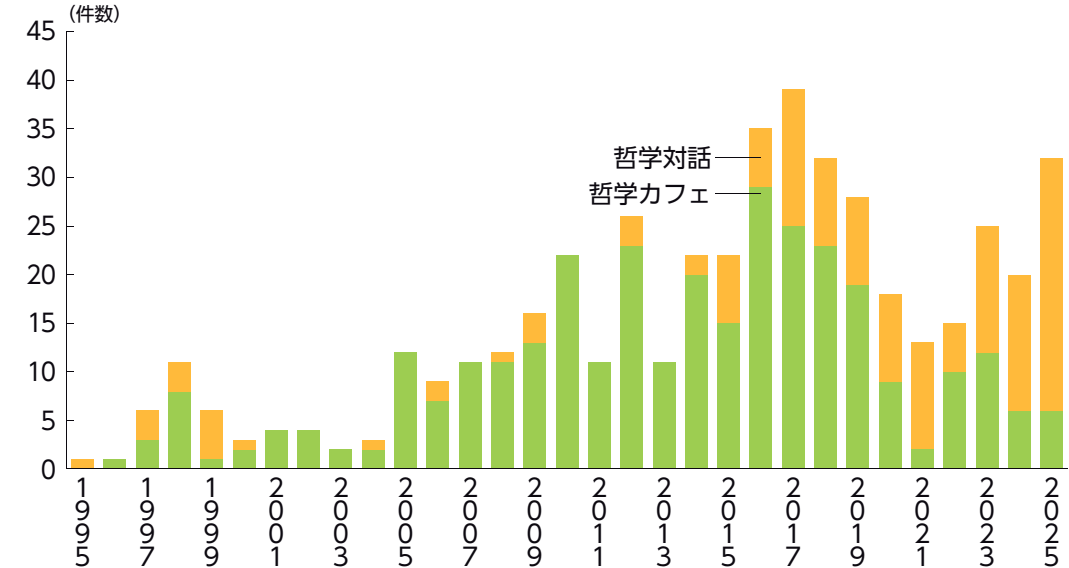
1992	哲学者マルク・ソーテが、パリ「カフェ・デ・ファール」で最初の哲学カフェを開く
1996	マルク・ソーテ著『ソクラテスのカフェ』邦訳出版
1998	鷲田清一教授（注 1）の「臨床哲学」の理念のもと、大阪大学大学院文学研究科に臨床哲学研究室を創設
2003	クリストファー・フィリップス著『ソクラテス・カフェによこそー誰にでもできる哲学への招待』邦訳出版
2005	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（注 2）設立 大阪大学臨床哲学研究室関係者が中心となり、「カフェフィロ」誕生
2011	東日本大震災で原発事故。専門家任せにせず自ら考える意識が市民に高まる
2020	コロナ禍で対面の活動が減少。社会活動の再開とともに再び活発に。最近では 167 件に上る（サイト「哲学カフェ・哲学対話ガイド」より）（注 3）

注 1) 肩書は当時
 注 2) 2016 年に CO デザインセンターに改組
 注 3) 同サイトに掲載されている「哲学カフェ一覧」をカウント
 出所) 識者の談話等をもとに、NIRA 作成。
 「哲学カフェ・哲学対話ガイド」<https://www.135.jp/>



哲学対話の様子（永井玲衣氏提供。撮影：八木咲氏）

新聞全国紙における「哲学カフェ」「哲学対話」登場記事数の推移



注 1) 朝日・読売・毎日・産経・日経
 注 2) 2025 年は 11 月 11 日まで
 出所) nifty「新聞・雑誌横断検索」、日経テレコン（いずれも 2025 年 11 月 11 日アクセス）

～5人の識者の意見～

哲学カフェの広がりとは 社会にどのような意義をもたらすのか

哲学カフェの活動が広がる背景

- ✓ 2011年の原発事故をきっかけに、専門家に頼らず、市民自ら問題を考えるように
- ✓ 不安や苦しみ、好奇心、怒りを聴き合い、他者につながる場の不足

哲学カフェ（哲学対話）では

- ✓ そのものの問いから、意味や概念を考える
- ✓ 異なる専門、考え方、価値観を知り、理解する
- ✓ 背景の異なる人々が集い、「気軽な学び」と「人との適度なつながり」を得る

哲学カフェの広がりが社会にもたらす意義

- ✓ 「よろん」を得て、政治の本質的な議論を深めるきっかけとなる民主主義のレッスン
- ✓ 異なる意見に耐える「知的な体力」を養い、一緒に言葉を育て信頼を築く「小さな政治の場」
- ✓ 教育やビジネスの現場の意識変化、組織変容を生み、包摂的・民主的な社会の実現に寄与



PDFはこちらから

| N | I | R | A |

わたしの構想 No.81

2025 年 12 月 10 日発行

©公益財団法人NIRA 総合研究開発機構

編集：榊麻衣子（編集長）、神田玲子、河本和子、山路達也

本誌に関するご感想・ご意見をお寄せください。

E-mail：info@nira.or.jp

[\[NIRA 総研ホームページ\]](https://www.nira.or.jp)

<https://www.nira.or.jp>

諸活動を紹介するホームページをご利用ください。

[\[NIRA 総研 Facebook\]](https://www.facebook.com/nira.japan)

<https://www.facebook.com/nira.japan>

研究成果や活動状況を紹介していますので、ご利用下さい。